
彼と彼女の短いお話

風楽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼と彼女の短いお話

【Nコード】

N6372V

【作者名】

風楽

【あらすじ】

結婚二年めの二人。ほのぼので、ちょっと甘い日常。重複投稿

作品

杏仁ブラマンジェ・夏のお話

無い。

こよりは、冷蔵庫の前でうろたえていた。

無い無い無い。あたしの杏仁豆腐！

それは、あるコンビニで期間限定で発売された物だった。

『とりとりける杏仁豆腐』

コンビニでこれを見つけた時、こよりはこのネーミングにちよつと興奮した。何故なら、こよりが知っている杏仁豆腐は寒天ベースの固いやつだけだったからだ。

それが、とりとりけちゃうなんて……うわ、たまらない。

しかも、棚にあるのはラスト一個。これは買うしかないでしょうと、こよりは商品を手にいそいそとレジへ向かった。それが三日前のことだった。これっきり一期一会の味なのだから、すぐに食べるのはもったいない。そう思い、冷蔵庫に大事にしまっていたたくタイミングを見はからっていた。

そうしたら、だ。

今日という日は何かの呪いかというくらいにすべてがうまくいかず、こよりは、胸のあたりが重苦しくなるのを止められずにいた。

これはもう、食べるしかないよ。魅惑の杏仁豆腐さん。おいしくいただいて、その感動で元気を出してやる。

夕食の前にはそう決めていた。冷たいデザートが一番おいしいのは風呂あがりだろうということと、いつもより時間をかけて入り、気持ち盛り上げてみみた。

そして、お待ちかねの瞬間がようやくやってきたというのに。いとしい杏仁豆腐の姿は、置いたはずの場所はもとより、冷蔵庫の棚

のどこにも見当たらない。万が一と思い冷凍庫の中まで探ってみたが、やっぱり無いのだ。

どうしよう。どうしたらいいんだろう。

そりゃ、寝坊したとか、朝ごはんの目玉焼きを作る時に黄身がつぶれちゃったとか、一つ一つはたいしたことじゃない。

でも、そんなささいなことでもいくつも重なると、今日という日が嫌いになりそうになっちゃうじゃない。そしたら、そんな自分をリセットしたいじゃない。なんでもいい、無理矢理お楽しみを作つて。

なのに、それが消えちゃってたら、どうしたらいいの。

シヨックのあまり冷蔵庫の前でへたりこんでいたこよりは、そこで、はたと気がつく。自分が食べていないのであれば、あとは一人しかない。

陽一さん！

しかし、慌ててキッチンを出た時には既に遅く、こよりが居間で見た物は、陽一の前に置かれた空っぽの容器だった。

「あたしの杏仁豆腐！」

こよりの突然の大声に、陽一がぎよつとする。しかし、こよりはそんなことにかまっていられる余裕は無い。

「ああ、食っちゃった」

気を取り直した陽一に、けろりと言われ、こよりはつい、かつとなった。

食っちゃった、じゃないよ。食われちゃったのは、見ればわかるよ。なんで食っちゃったのかってことなのよ。

「なんで!？」

「なんでって、うまそうだったから」

そりゃそうだよ、あたしだって一目惚れで買ってきたんだもの。絶対おいしかったに決まってる。

あ、やばい。なんかぐるぐるしてきた。

こよりがそう感じたとたん、陽一の顔がばやける。

嘘、あたし泣いてる？ 子供じゃあるまいし、杏仁豆腐を食べ損ねたくらいで。

頭の隅っこには冷静に考えている自分もいるのだが、それを感じることによって、泣いている自分が余計に情けなく思われて、更に涙が出た。

「なにも泣くことないだろ、杏仁豆腐くらいで」

そこに陽一の呆れ声がかぶさる。

かちんときた。自覚はあるのにどうにもならないところへ、そのセリフは火に油だ。

「勝手に食べちゃうことないじゃない。あたし、すっごい楽しみにしてたのに。サイテーだよ」

こよりのねちねちとした口調に、陽一が少し鼻白んだ。

「こんなの、また買えばいいだろ」

「期間限定だから無理だもん。これだって最後の一個だったし」

「そんなに食いたかったんなら、なんですぐ食わないんだよ。冷蔵庫に入れっぱなしだったくせに」

「そんなのあたしの自由です」

売り言葉に買い言葉とは、正にこういう状況のことを言うのだから。気まずい沈黙の中、陽一の顔を見ることができず、こよりは自分の膝を見つめていた。

やがて、陽一のため息が聞こえた。彼が立ち上がる気配と、玄関へ向かう足音が続く。

こよりの耳に、ドアの閉じる音がやけに大きく響いてきた。

「うー……」

言い合いで一度はひいた涙が、またにじむ。

なんで、こんな風になっちゃうの？

あんなことが言いたいんじゃないかった。別にコンビニデザートの一つ食べられたからって、こんなにこだわることじゃない。

頭ではわかっていた。

ただ、今日のマイナスな気持ちを全部、あの杏仁豆腐でリセット

するつもりだったこよりには、どうにも我慢ならなかった。

杏仁豆腐と一緒に、このもやもやした思いもとろかして、すべて呑みこんでしまうつもりだったのだ。それが突然無くなってしまったことで、逆上してしまった。

「陽一さんのばか！」

ただ一言、彼がごめんと言ってくれていたら、こうはならなかったかもしれないのに。

ぼろぼろとこぼれる涙をそのままに、こよりは陽一を責めた。

だが、それはたいして長くは続かない。何故なら、こよりがあんな言い方をしなければ、陽一の反応もおおのずと違っていたはずだからだ。それに、陽一が例え悪かったと思っていたとしても、あの時の自分は聞き入れられなかったと思う。

あたしもばかだ。

こよりは、ティッシュで思いきり鼻をかむと、ため息をついた。

陽一さん、どこ行っちゃったんだろ。

車の音はしなかったから、おそらくは近所にいるはずだ。

一瞬、探しに行こうかとも思ったが、すぐに思い直す。公園やファミレス、コンビニなど、陽一が行きそうな場所はけっこう広範囲になる。

それに、運よく彼が見つかったとしても、こんな気持ちのままでは同じことを繰り返してしまうかもしれない。まずはこの気持ちをどうにかしなくては。

でも、どうやって？

落ち着いてくると、泣いたせいだろうか、胃の辺りが寂しい気分気づく。すっかり忘れていたはずのデザートへの執着心がむくむくとわき上がり、こよりは、コンビニへ向かうために立ち上がった。

最寄りのコンビニまでは、徒歩で十分。道すがら、陽一が帰った

らなんと言おうかと考えてみたものの、いいアイデアは浮かばない。こよりは、煌々と通りを照らすコンビニの明かりを見て、心もスITCHを入れたらパツと明るくなればいいのにな、と、ぼんやり思った。

自動ドアをくぐると、アルバイト店員のやる気のない声が出迎える。

と。店の一番奥、要冷蔵の商品が並ぶ棚の前に、見慣れた後ろ姿があった。

陽一さん。

まだ顔を合わせるの少し気恥ずかしい気がして、こよりは入り口脇の雑誌コーナーに向かった。先ほど泣いてしまったことを思い出し、ガラスに映る自分の顔をチェックしてみる。

目の腫れぼったさを気にしつつ、陽一の様子をうかがうと、まったく動く気配がないのが気にかかった。

……何してんだろ。

雑誌コーナーで立ち読みならともかく、牛乳などが置かれる棚の前で微動だにしないとは。不思議に思ったこよりは、そつと後ろから陽一に近づいてみた。

右手をジーンズのポケットに突っ込み、左手にはコンビニの買い物かご。陽一が持つ、そのかごの中をのぞいたこよりは、目を疑った。

そこには、もうお目にかかれなるとばかり思っていた杏仁豆腐が入っていたのだ。それも、六つも。

ぽっかりと空いた、それが置かれていたらしい場所を見ると、

『好評につき期間延長！』

と書かれたポップが揺れている。

こよりは、じわじわと頬がゆるむのを感じた。

杏仁豆腐にありつけるのも嬉しいが、陽一は、何のためにこれを買ったのかとようとしているのだろう。

誰のために。

「いっぱいあるね」

まだ素直に顔を見ることはできなくて、かごをのぞいたままで、後ろから陽一のＴシャツの裾を引っ張る。

陽一は驚いた顔で一度振り向きはしたものの、またすぐにそっぽを向いてしまった。

まだ怒ってる？

そう口にする代わりに、こよりは別のことを訊いてみた。

「六つも食べきれる？」

「……俺も食うから」

俺も。

ということは、これは、やっぱり自分のために買ってくれる物なのか。

こよりは頬だけでなく、硬くなっていた心がゆるむを感じた。

帰り道。

レジでデザート用のスプーンを一つだけ付けてもらい、こよりは歩きながら杏仁豆腐を食べ始めた。

「んおっ……おいしい」

杏仁豆腐を頬ばるこよりを見て、行儀の悪いやつだな、と陽一が笑う。もう普段のままの二人だった。

杏仁豆腐は、口に入るとややわやわとろけ、するりと喉にすべり落ちていく。

こよりの知っている今までの杏仁豆腐とは、確かに違う。だが、この食感にはなんとなく覚えがあった。

容器を目の前に持ち上げ、街灯の明かりを頼りに側面に印刷された原材料を見る。生乳、生クリーム、砂糖、ゼラチン……。スプーンを口にくわえたままでしばらく悩んだ末、こよりは、頭の中の引き出しから一つのレシピを見つけ出した。

そうか、ブラマンジェだ。舌の上でふるふると震えるこの感触は、あのデザート菓子にそっくりだ。

作り方は、ふやかしたゼラチンに温めた牛乳と砂糖を合わせ、ゆるく泡立てた生クリームを混ぜて冷やすだけ。案外簡単だ。

あれはアーモンドの香りをつけるんだけど、杏仁風味で作るなんて思いもよらなかったな。

今度、自分でも作ってみようか。とろりとろけるそれを味わえば、今日のことを思い出せる気がする。

嫌なことがあっても、けんかをして。結局、何よりもこよりの心を溶かしてくれるのは、陽一なのだということを。

隣を歩く陽一の横顔をそっと盗み見て、こよりは大事そうに杏仁豆腐の最後の一さじを口にした。

【終】

お鍋の中の愛情

こと、こと、こと。

お鍋が小さな音をたてている。落とし蓋代わりのアルミホイルの下では、イカと大根が煮えている。

陽一さんと暮らし始めて、そろそろ二年。好みもわかってきた。今日のイカと大根の煮物も、陽一さん好みに、みりんとお醤油で少し濃いめの味付けにしてある。

もういいかな。

アルミホイルをめくって、煮え具合を見る。

うん、いい感じ。

火を止めて、お皿にイカだけを取り出す。煮過ぎるとゴムみたいになっちゃうからね。

大根はお鍋に残したまま、再びアルミホイルをかぶせる。

なんていうんだっけ。こうして温度が下がるのと同時に、味がじつくり染みていくんだよね。昔、科学の時間に聞いた用語があったと思ったんだけど。陽一さんが帰ったら、訊いてみよう。

そのことを知るまでは、外側ばかりしよっぱくて、真ん中は真っ白なままの大根の煮物ばかり作っていた。でも、今は大丈夫。あとは、夕食前になったら、イカをお鍋に戻して温めればいい。陽一さんは、おいしいと言ってくれるかな。

こうして好きな人のためにごはんの支度をしている時、しみじみと幸せだなと思う。そりゃ、たまには失敗もあるし、何を作っているかわからなくて困ることもあるけれど。

誰にも譲れない、あたしにとっての至福の時間。つきあい始めた頃のような、熱さとか激しさのようなものはまったく違う、穏やかでやわらかな想い。

あたしの今の気持ちは、この大根と似ている気がする。ぐつぐつ煮えたぎるのではなく、静かにゆっくりと、でも、確実に心の芯ま

で想いが染みていく。飾りけの無い、毎日でも食べ飽きない、そんな愛情。

あ、車の音。

陽一さんが帰って来たのかもしれない。しまった、メインの方を急がなくちゃ。

慌てて包丁を動かしながら、考える。

今の思いつきを、後で陽一さんに話してみようかな。じっくりと味が染みた大根を添えて、それに例えてみたら、きっと言葉以上にうまく伝わる気がする。あなたのことが大好きだという、この気持ち。

【終】

ふわふわり 秋のお話

「んー、いいお天気」

つぶやきながら一つ伸びをして、こよりはベランダの手すりに頬杖をついた。正確には、そこに干された布団の上に。

日に日に高くなる空と、時折ひやりと吹く風は、確実に秋が深まっていることを告げていた。だが、日差しはまだ十分に力強い。

晴れわたった空の下、ぽかぽか陽気を吸い込んでいく布団のぬくもりに、こよりは目を細めた。一人で楽しむのはもったいないと思いはしたが、このぬくもりを一番に分け合いたい人は、あいにく今は出かけている。

陽一さん、早く帰って来ないかな。

しばらく前に、煙草を買いに行く、と言い置いて出て行ったから、行き先はおそらくコンビニだ。煙草一つ買うだけにしては遅いが、雑誌の立ち読みでもしているのだろうか。

家事を済ませてしまった手持ち無沙汰を一人ぼっちでもて余していたこよりは、不意にあることを思い出した。

そうだ、あれ。

こんな天気の日には飛ばすには最高だ。そんなことを考えながら、キッチン脇に置いてある買い物バッグのところへ向かう。バッグの中を探ってお目当ての物を取り出すと、またベランダにとって返した。

鮮やかな色のプラスチック容器の蓋を開け、ラッパに似た形のストローに液をつける。吹き口から静かに息を送り込むと、先端から飛び出したシャボン玉は不規則な列を作り、上空にゆらゆらと昇っていった。

シャボン玉の揺らめく色が、青い空によく映える。

やがて、すべてが壊れて消えてしまうと、こよりは、またシャボン液をつけたストローをくわえた。少しだけ強めに息を吹き込むと、

今度は、初めよりも細かなシャボン玉が群れをなして現れる。

そうやって、何度か消えては吹きを繰り返している内に、できる限り大きな物を作って飛ばしてみたくなった。ストローをくわえ、慎重に息を送り込む。先端から徐々にふくらみを増していくシャボンの膜を見つめつつ、息継ぎをしたこよりが、更に息を吹き込もうとした時だ。

「ただいま」

玄関の方向から、陽一の声が聞こえた。

「あ、おふぁえ……」

「ぱちん。」

「あっ」

反射的に振り返った衝撃で、シャボンの膜は呆気なく壊れてしまった。

「あーあ……」

「どうした？」

ベランダの手前までやって来た陽一に声をかけられると、こよりは、わざと口を尖らせてみせた。

「せっかく大きいの作ってたのに」

「なんだよ、俺のせいだよ」

こよりが本気でないことはすぐにわかるらしく、陽一も笑って返してきた。かまちの辺りに腰を下ろして、買って来たばかりの煙草に火を点けると、懐かしいことやってるな、と、こよりの手元を見つて言う。

「わざわざ買ったのか？」

「うっん、佐藤さんちの由美ちゃんにもらったの」

「ああ、あの子か」

こよりが、二人の部屋の隣に住む家族の名前をあげると、陽一がうなずく。手作りのケーキを焼いた時など、よくお裾分けしに行くものだから、幼稚園に通うその家の娘はこよりになついているのだ。このシャボン玉セットは、その子からの日頃のお礼ということらし

い。

「陽一さん、大きいの作れる？」

「大きいのはわからんけど、面白いのは作れる」

こよりからストローだけを受け取ると、陽一は深く煙草を吸った。煙を吐き出す前にストローをくわえ、息を吹き込む。

「わ、わ、わ」

目を丸くするこよりの前に、ふわん、と現れたのは、煙を封じ込めた白いシャボン玉だ。

「すごい、陽一さん！　なんでそんなの作れるの？」

「ガキの頃、親父がやってくれたからな」

普通のものよりも頼り無げに浮かぶそれは、二人が見つめる前で、すぐにはじけて消えてしまった。あとには一瞬、煙が靄もやのような揺らめきを見せたが、それも消える。

ストローをこよりに返すと、陽一は笑った。

「思い出したよ。親父がこれをやると、子供を差し置いて、おふくらが一番に喜んでた」

「ふうん、お義母さんもシャボン玉好きなんだ」

こよりは陽一の隣に腰を下ろすと、また大きいものを作ろうと挑戦し始めた。が、その努力は、陽一をつぶやきで無に帰する。

「親子で子供みたいな女に惚れたつてのも、なんだかなあ……」

「ふあ？」

ぼしゃんと膜がしぼんだストローをくわえたまま、こよりが陽一を見ると、彼は何事も無いような顔で煙草をふかしている。だが、よく見ると耳たぶが少し赤い。

「あのー……今、何て？」

照れているらしい陽一の様子が可愛くて、こよりは、彼をからかってみたくなった。陽一は昇る煙を眺めたまま、聞こえなかったんならいいよ、と少しふてくされたように言葉を返す。

ストローを差し込んだ容器を脇に置くと、こよりは彼の腕に自分の両腕を絡ませた。

「えーと、聞こえてはいたんですけども」

「……だったら聞き直すな」

陽一の顔が、はつきりと赤くなった。

「もう一回聞きたいかなー、なんて」

「嫌だね」

「いいじゃない。ねえ」

「おまえはシャボン玉で遊んでろ」

不機嫌な口調だが、こよりの腕を振り払ったりはしない。

陽一が吸い終わった煙草を灰皿に押しつけて消すのを待って、こよりは彼の肩に頬をすり寄せた。煙草の甘苦い香りがする。

「陽一さん」

「ん？」

「けち」

「知るか」

それがどうした、と言わんばかりだが、そつとこよりの頭に頬を寄せてくる仕草がやさしい。

口先だけの言い合いの言葉は、まるで、でき損ないのシャボン玉のようにはじけては消えていった。

【終】

つなぐ気持ち、冬のお話

「こより」

名前を呼ばれてこよりが振り向くと、陽一がこちらに向かって近づいて来るところだった。待ち合わせ場所の公園に立つ時計に目を向けると、針は約束した時間の五分前を指している。

「待ったか？」

「うっん、全然」

首を横に振りながら、普通の恋人同士のようなやり取りがくすぐったくて、こよりは笑ってしまった。

「なんだか妙だな」

陽一も、どこか落ち着かない顔で笑っている。

たまには映画でも見に行こうと誘った陽一に、外で待ち合わせをしようと提案したのはこよりの方だった。

結婚して同じ家に暮らしているというのに、物好きな。そう呆れる陽一に、たまには違ったこともしてみたい、とこよりが言うのと、渋々ながらも彼はうなずいた。

でも、やっぱり言ってみてよかった、とこよりは思った。

まだ年が明けたばかりの冬の街は、空は晴れ渡っていても風が冷たい。だが、陽一を待つこよりは、寒さなど少しも感じていなかった。

やって来た陽一を見つけた時の気持ち。

思わず手を振りたくなるような、あの気持ち。

好きな人との待ち合わせが、こんな気持ちになるものだということを、こよりは久しぶりに思い出していた。

「……行くか」

「うん」

陽一が、革の手袋をはめた左手を差し出す。こよりが右手を出すと、陽一が目を見開いた。

「おまえ、手袋は？」

「あ。……忘れてきちゃって」

興奮なのか緊張なのか、たぶん両方なのだろうが。待ち合わせ場所に着いて初めて、こよりは自分が手袋を忘れて来たことに気づいたのだった。

約束の時間までには間があったけれど、取りに戻るほどの余裕は無かった。それほど寒さも感じていないこよりは、まあいいかと思っただのだ。

「しょうがねえな、おまえは」

そう言つと、陽一は自分の左の手袋をはずし、こよりの左手にはめた。

「いいよ、それじゃ陽一さんが寒いでしょ」

「大丈夫だよ」

慌てるこよりの右手を、陽一が左手で握る。そのつないだ手を、

陽一は自分のコートのポケットにしまった。

「これでいいだろ？」

陽一の顔は、照れているようだが、どこか得意げで、こよりはつい笑ってしまった。

「何がおかしいんだよ」

「うつん、なんでも」

ポケットの中で手をつないだまま、二人は歩き出す。

「陽一さんの手、大きいよね」

「おまえが小さいんだ」

ぶかぶかの手袋をはめた手を、こよりが冬の陽にかざし、そんな他愛ない言葉を交わしながら。

つながれた手のぬくもりを感じながら。

【終】

トライフル 春のお話

カンカンカンカン！

陽一は、何か硬い物同士が叩きつけられるような音で目を覚ました。

枕元の時計を見れば、七時を少しまわったところ。布団から顔だけを出してこよりを探したが、姿は無い。

なんなんだよ、朝っぱらから。

せっかくの日曜日だったのに、と布団をかぶり直してはみたものの、音は一向にやむ気配が無い。カンカンカン……と、速いリズムで聞こえてくる甲高い音は、妙に耳につく。どうやら音の出所はキッチンのようなのだ。

しばらくはそのまま粘ってみたが、頭はさえていく一方だ。

陽一はため息をつく、二度寝はあきらめて音の発生源へ向かった。

「何やってんだ？」

「あ、おはよう、陽一さん」

背後から声をかけてみれば、こよりがとびきりの笑顔で振り向いた。その手元を見ると、ボウルと泡立て器を手になっている。生クリームだろうか。何やら白い物を泡立てているところだった。

「何作ってんだ？」

砂糖や小麦粉の袋が出ているから、お菓子だとは思うが。

「メレンゲだよ」

「めれんげ？」

ぶつけた疑問にさらりと答えられたものの、ほとんど料理をしない陽一は、それが何になるのかわからない。おうむ返して首を傾げ

る陽一へ、こよりの説明が続く。

「卵の白身と、お砂糖を混ぜて泡立ててるの。ケーキ焼くんだよ」
ケーキねえ。

甘い物は嫌いではないが、目がないというほどでもない陽一には、早朝から汗をかいて卵白を泡立てる気持ち的理解できない。

しかし、こよりとてそこまでの甘党ではないはずだが。

陽一の訝しげな顔をよそに、こよりは休み無く泡立て器を動かしている。その顔は妙に真剣で、陽一は、これ以上邪魔をすることに少々気がひけた。

「なあ、朝めしは？」

「おむすび」

こよりが目で示した先には、焼きおにぎりと、だし巻き卵にかぶの浅漬けが盛られた皿がある。

「あたしは先に食べちゃったから、セルフでよろしくお願いします」
はいはい、と心の中だけで返事をして、おにぎりの皿と、冷蔵庫から取り出した麦茶のボトルを手に、陽一はキッチンを出た。

居間のテレビのスイッチを入れて座り、皿にかかったラップをはがすと、こうばしい香りが鼻をくすぐった。

醤油ではなく味噌が塗つてある焼きおにぎりは、陽一の好物だ。かしりと一口かじると、味噌の塩気とごはんの甘味、火にあぶられた焦げめの香りが広がる。

食べ続けていくと、芯には梅干しが入っている。初めて食べた時は意外な組み合わせに思えたが、焼きおにぎりに梅の酸味はなかなか相性がいい。途中で強制的に口直しが入るので、食べ飽きないのだ。

ぼんやりとニュースを見ながら、一つめを食べ終える。気がつけば、キッチンの音はだいぶ静かになっていた。

だし巻き卵をつまんで、陽一は軽くため息をついた。不満のためではなく、卵焼きの甘味がちょうどよかったからだ。そして、苦笑いもれる。めしがうまいってだけで、朝からこうして放ったらかしにされても許せるんだから、俺も単純だ。

やがて、キッチンからは甘い香りが漂ってきた。

それにしても、なんだって突然ケーキなんだ？

皿の上の物を残らずたいらげ、キッチンに意識を向けつつ煙草に火をつけると、陽一は天井へ大きく煙を吐き出した。

誰かの誕生日や何かの記念日という可能性を考えたが、思い当たるものは無い。他に何か忘れていないか、と首をひねったが徒労に終わった。

最後にいきついたのは、嫌がらせ、という、あまり考えたくない可能性だった。

このところ仕事に追われていた陽一は、こよりにあまりかまっていられずにいた。企画書を早くあげるとせっつかれて、そんな時間も気持ちの余裕もまったく無かったのだ。それが今週、やっと一段落ついた。

たっぷり眠って、二人でのんびり食事をして。今日は、そんな当たり前の休日を久しぶりに満喫できるはずだったのだ。なのに、実際はこうして朝からたたき起こされ、一人でにぎりめしをかじっている。

多少放っておかれたからといって、お返しをするような拗ね方をする彼女ではない、と長年の付き合いから思う。思いはする、が。

そうして陽一があれこれと考えていると、突然キッチンから奇声があがった。

「はわあああー！」

「こより！？」

怪我でもしたのか、と陽一は慌てて腰を浮かしかけたが、そのわりには間の抜けた声だ。空いた皿を片付けがてらキッチンへ行くと、オーブンの前でこよりがへたり込んでいた。今にも泣きそうな顔で、

口をぱくぱくさせている。

陽一は皿をシンクに置くと、こよりの隣にしゃがんで声をかけた。

「どうしたんだよ」

「し……」

「ん？」

「失敗してしまったぁ……」

陽一がオーブンの中をのぞくと、なるほど、ケーキになる予定だった生地は、型の中で無様にふくらみ損ねていた。だが、香りはいい。

「食えないのか、これ？」

訊いてみると、おいしくないよ、とつぶやいて、こよりはうつむいてしまった。

丸々生ゴミにしてしまうのは惜しい気がして、陽一は、カトラリーが入った引き出しからフォークを取り出すと、まだ軽く湯気が出ているそれに突き刺してみた。素直に先が入ってはくれなかったが、なんとか一切れ口にする。

固い。味は確かにケーキだが、この食感はなんと言ったらいいのだろう。ケーキのことをスポンジとも呼ぶらしいが、正に、食えるスポンジといったところか。

「味はいいぞ」

「無理に食べなくていいよぉ……」
「まずいな。」

ケーキはともかく、この状態のこよりはいただけくない。放っておくと際限無く落ちこんで、いつ浮き上がってくるかわからなくなってしまう。

「別に、これはこれで食えるからいいじゃん。味はいいって。ケーキと思わなければ」

とりなすように陽一が話しかけていると、こよりが突然顔を上げる。

しまった、最後の一言が余計だったか。

「そっだ！」

「な、何？」

「普通のケーキと思わなければいいんだ！」

何がどう引き金になったのかさっぱりわからなかったが、どうやら元氣は出たようだ。向こうで待ってて、と、こよりにぐいぐいと背中を押され、陽一はキッチンを追い出された。

二十分ほどして、何やら奮闘しているらしい気配がおさまると、

こよりがグラスを手にキッチンから出て来た。

「はい、食べてみて」

フォークと共に渡されたグラスの中身は、一口サイズにカットされた、おそらくは先ほどの失敗作であるスポンジ生地。それに、ゆるめの生クリームとチョコレートソースがかけられている。刻まれた苺も見えた。

一つ口にする。

「うまい」

「よかったあ」

陽一をつぶやきに、こよりがほっとしたように笑顔になった。緊張していたのか、肩からすっと力が抜かれる。

お世辞ではなく、本当においしかった。スポンジ生地は、どうやらシロップにでも浸されたらしく、しっとりしている。だが、怪我の功名というか、先ほどの歯ごたえがすべて消えてしまった訳でなく、かえって適度な食感が残り、生クリームとチョコレートソースのとりりとした感触の中でいいアクセントになっていた。味も、ただ甘いだけではなく、苺の酸味と、シロップに混ぜられた洋酒の香りが全体を引き締めている。

「イギリスのデザートに、トライフルっていうのがあるのを思い出したの。いやー、うまくいってよかった」

残って固くなっちゃったスポンジのリサイクルお菓子なんだよ、と蘊蓄をたれながら、こよりは、陽一がデザートを口に運ぶのをにこにこ見ている。

「陽一さん、このところ忙しくて疲れてるみたいだったから。疲れには甘い物が一番かなと思って」

「それで、朝からケーキか」

「うん」

どうかな、効いてきたかな、と、こよりは首を傾げてこちらを見ている。陽一は、思わず嘖き出した。

「ぶははっ」

「え、え、何がおかしいの？」

こよりはこよりなりに、自分のことを考えてくれたのことだったのか。とはいえ、なんともずれた気遣いに笑いがこみ上げる。何より、それによつてこんなにも上機嫌になっている自分がおかしかった。

「……甘いなあ」

「嘘、そんなに？」

味のことじゃねえよ、と陽一は心の中で答える。

俺が、おまえにだ。

青くなるこよりを横目に、陽一はトライフルをたいらげた。

【終】

ないしょ、夏のお話

「えー、出かけちゃうの？」

洗濯物を干す手を止めて、こよりは軽く不満の声をあげた。

降水確率ゼロパーセントの日曜日。一緒に過ごしたいということよりの思いとは裏腹に、陽一は一人で出かけると言い出したのだ。

「どこ行くの？」

「ん……まあ、ちょっと」

陽一は言葉を濁す。手には既に車のキーを持ち、出かける態勢は整っていた。引き止めても無駄らしいとは思ったが、それでも、こよりは言ってみる。

「お天気いいし、どうか一緒に行きたいな」

「……今度な」

今度って、いつ。こよりは口を尖らせる。

そんな気持ちを察しているのか、あまり目を合わせないようにして、陽一は出かけて行った。

陽一さん、どこに行くんだろう。ベランダから陽一の車を見送り、こよりはまた洗濯物を干し始める。

せつかくの休日だというのに、陽一が一人、行き先も告げずに外出してしまうということが、一、二ヶ月に一度あった。

こよりが時計に目をやると、針は十時をさしている。このくらいの時間に家を出て、早ければ二時間ほどで戻ってくるが、まれに夕方近くになることもあった。

一体どこで何をしているのか。電源を切っているらしく、携帯電話もつながらない。

最初のうちはしつこく訊いてみもしたけれど、陽一は頑として答

えないので、最近ではもうあきらめていた。だからといって、不満が消える訳ではないが。

せめて、行き先くらい言ってくれてもよいではないか。
パン！

不必要なほど勢いよく音をたてて、こよりは、陽一のＴシャツのしわをのばした。

一通り家事を済ませると、そろそろ昼になろうかという時間だった。陽一はまだ戻らない。

こよりは、一人で昼を済ませてしまおうと、キッチンに立って何を食べようか考えてみる。だが、何も浮かんでこなかった。

一人ごはんなんて、つままないな。

陽一が仕事でいない時は、一人の食事もそれなりに楽しむことができるが、こんな時はメニューを考える気力がわいてこない。適当でいいや、と、こよりは目についた素麺の束を手にとった。

鍋に湯を沸かし、麺を束ねているテープをはがして、ばらりと放り込む。煮立ったところへ差し水をする、表面を覆っていたコンもりとした泡が一気にしぼんだ。

頭冷やすのも、こんな風にできればいいのに。こよりは軽くため息をついた。

ゆであがった素麺をザルにあげ、流水でもみ洗いする。器に麺を盛り、めんつゆと水を適当にかけて、はたと気がついた。

おネギ、どうしよう。冷凍庫から氷を取り出して浮かべるまではしたものの、青味の用意をしていなかった。

しかし、陽一がいれば用意もするが、自分一人の食事にはそこまですでにだわる気がせず、こよりは器と箸を手にキッチンを出た。

居間に移動してテレビをつけて見るが、興味がひかれるような番組は無さそう。かといって黙々と素麺をすすめる気にもなれず、こ

よりは、適当にチャンネルを変えつつテレビを見続けた。

ずずつと麺をすすると、冷たさが齒に気持ちいい。

陽一さん、何してるのかな。テレビの画面を見つめていても、内容はまったく頭に入ってこない。考えるのは陽一のことばかりだった。

『それって浮気なんじゃない？』

テレビからの声にどきりとして、こよりはチャンネルを変えていた手を止めた。画面の中では、おネエキャラのコメンテーターが軽いノリの恋愛相談を受けている。

浮気。考えたことも無かった。

しかし、それなら行き先を教えてくださいのは何故なのだろう。

じわじわと重苦しい思いが胸にこみ上げてくる。

それを振り払うように、こよりはぶんぶんと首を振った。

無い無い、そんなこと。陽一さんはそんな人じゃない。もし、あたしのことが嫌いになったなら、そう言ってくれるはずだもの。

陽一を信じる気持ちと、彼を疑いたくないという気持ち。それらの方が不安よりもはるかに強い。

それでも完全に消せる訳でもなく、こよりは、八つ当たりのように乱暴にテレビのスイッチを切った。

素麺をたいらげ、空いた器をキッチンへ運ぶ。

スポンジに洗剤をつけると、こよりは、器はもとより、普段は手を抜きがちな鍋の取っ手の部分まで執拗に洗い始めた。そうすれば、少しグレーがかった自分の気持ちもきれいになるのではないかというように。

違うよね。違っつて言っつて。陽一さん。

「陽一さん……」

声に出して呼んでみる。

早く。早く帰って来てよ。

すると、背後から陽一が答えた。

「おう」

「陽一さん!？」

こよりが驚いて振り向くと、キッチンの入口に陽一が立っている。

「帰ってたの？」

「今な。声かけたけど、聞こえなかったか？」

車の音もしていたのだろうが、まったく気づかなかった。

「……わかんなかった」

こよりの言葉に、どれだけ真剣に皿洗ってたよ、と陽一が笑う。

その笑顔を見た途端、さっきまでの不安がふわりと溶けるのをこよりは感じた。それと同時に、不安になってしまった自分が情けなく思えて涙腺がゆるむ。

「陽一さあん」

「な、なんだ。いきなり何泣いてんだ」

あせる陽一に、こよりは泡だらけのスポンジを握りしめたまま抱きついた。

「おまえ、泡!」

「うるさい、洗濯するのはあたしだ!」

涙声で怒鳴り返しておいて、陽一の背中にまわした腕に力を込めて抱きしめる。

「なんなんだよ、おまえは……」

呆れた口調だが、声はやさしい。

「陽一さん、浮気してるの？」

気づいた時には、言葉が口から出ていた。陽一の即答が返ってくる。

「するか、そんなもん」

「じゃ、一人でどこ行ってるの？」

「……」

「やっぱり浮気してるんだあー」

そんなことはもう欠片も思っていないのに、こよりは言葉が口から出てしまうのを止められない。何度でも、陽一が否定してくれる言葉を聞きたかった。

「してねえっての」

「だったら、どこで何してきたのか話してよ」

言ってくれるまで、離してあげないんだから。こよりが固い決意でしがみつくと、陽一は、それでもしばらく言い渋っていたが、とうとうあきらめたように口を開いた。

「パチンコ」

「ばちんこ？」

予想だになかった答えに、こよりは陽一の顔を見上げた。

「陽一さん、パチンコ好きだったの？」

今まで、彼がそんな素振りを見せたことは無かったが。

「いや、別に好きじゃない」

「……訳わかんない」

「ちゃんと話すから。でも、先に着替えさせろ。背中冷てえよ」

ぽかんとするこよりの背中をあやすように軽く叩き、陽一は言った。

「ストレス解消なんだよ」

着替えて居間に落ち着くと、陽一はこよりに話し始めた。

「……余計、ストレスたまりそうな気がするんだけど」

こよりは中に入ったことがないが、パチンコ店の前を通り、偶然ドアが開いた時の大音量を思い出せば当然の意見だろう。

陽一もそれはわかっているのか、苦笑いで答える。あそこは特殊

な空間だと思つ、と。

営業の仕事で不特定多数の人間と会っていると、時々どうしようもなくイライラするのだ、と陽一は言う。

仕事も、人と会うことも好きだ。それでも、たまらなく心がささくれ立つことがある。

そんな時、外回り中にたまたま次の約束までぼっかりと時間が空いたことがあり、何気なく一軒のパチンコ店に入ってみた。

煙草の匂いと、耳鳴りがしそうなほどの音。そして、大勢の人間。しかし、誰も一言も口をきかず、ただ目の前の台を見つめている。ちよつと異様な光景だった。

そんな中で、空いた台に座つて見よう見まねで打ち始めると、陽一は、不思議に気持ちが軽くなるのを感じたという。

「理由はよくわからないんだけどな」

あれほどの喧騒の中、大勢の人間に囲まれながら、誰とも話さないでいられることで、何故か気持ちがすっきりする。それ以来、煮つまつた気分になると足を運ぶようになった。使う額は五千円までと決めているから、早ければ二時間もたないこともあるが、勝ち負けは二の次だからそれでもいいのだ。

「どうして今まで話してくれなかったの？」

のめり込んで退つ引きならないとか、そんな理由ならともかく、こつまで隠すほどのことだろうか。こよりがそう言つと、陽一はそつぽを向いてつぶやいた。

「……俺がストレスためてるなんつたら、おまえが心配するだろう。照れているのだろう、耳たぶが赤い。」

こよりの胸に愛しさがわき上がる。ぶっきらぼうだけれど、やさしいのだ、彼は。

「でも、あたしはちゃんと話して欲しいな」

嬉しいことだけでなく、つらいことも分けて欲しい、とこよりは思う。さっきまでの不安を、陽一が笑顔一つで吹き飛ばしてくれたように、自分も陽一の支えになりたかった。

陽一がほほ笑む。

「そうだな。ちゃんと話さないと、また浮気だなんだって疑われるもんな」

「あ、それは、別に本気でそう思ったわけじゃ」

「本気じゃなくても、疑ったんだろ？」

「……すいません」

小さくなるこよりの頭を撫でて、もう内緒は無しにするからな、と陽一は笑った。

「そうだ。ね、晩ごはんは何かいい？」

自分が陽一を元気にできるとしたら、やっぱりこれだろう。気を取り直したこよりが身を乗り出して訊くと、陽一が少し考え込む。

「そうだな……じゃ、レタス巻き」

「了解」

レタス巻きは、ひき肉と野菜を濃いめの味付けで炒めてレタスの葉にくるんで食べる、こよりの自慢の料理だ。あれでビール飲むとうまいんだよな、と陽一は屈託なく笑っている。

それを見て、こよりは気がゆるんだ。

「じゃあ、レタスと納豆買って来なくちゃ」

「納豆？」

しまった。こよりがそう思った時には、陽一から笑顔が消えていた。

「なんで納豆がいるんだよ？」

「え……ええーつと……」

陽一は、大の納豆嫌いだ。こよりが一人で食べることまで止めはしないが、あの匂いは食い物じゃないと言って、自分はどうしても食べようとしなない。

あたしにも、内緒があつたんだよなあ……。

実は、レタス巻きにはこっそりと納豆が入っていたのだ。量はひき肉の半分程度だし、細かくたたいているのと、香味野菜の風味のおかげで、まったくバレずに済んでいた。ちょっとした、いたずら心だったのだが。

やっぱり、内緒も少しは必要かも。

ほぞを噛んでも、もう遅い。天井を見上げて、こよりは、必死に陽一への言い訳を考えていた。

【終】

夜明け前

こよりが再び目を開けると、まだ夜は明けきっていないようだった。

隣で規則正しい寝息をたてている陽一が万が一にも起きぬよう、こっそりため息をつく。何もしてないと、時間って長い。

昨日の昼間、ついすっかりと昼寝をし過ぎてしまったことが原因らしく、まだ暗い内から目を覚ましてしまったこよりは、二度寝にも失敗してこうして煩悶しているのだ。

いつそ起きちゃおうかな。もう眠れないのであれば、やれることはたくさんあるのだから、それに手をつければよいのである。

だが、それでは物音をたてて陽一を起こしてしまいかねない。さすがに夜明け前にたたき起こしてしまうのは気がひけて、ずるずると決心がつかないまま、こよりはこうしているのだった。

薄ぼんやりと明るくなりつつある天井へ向けていた視線を、ふと陽一の方へ移す。彼が起きる気配は無い。

あ、ひげ。

陽一のうつすらと生えたひげに目をとめると、どうにも我慢がなくなくなり、こよりは、彼の顎のあたりに指を這わせた。起こさぬように気づかないながら、あくまでも、そっと。そして、かすかにざらつく感触を楽しむ。

本人に話したことは無いが、こよりは陽一のひげが好きだ。と言っても、常に生やしていて欲しいというほどの強い欲求ではない。

ただ、営業という仕事柄、当然平日はきれいに剃られてしまうそれが、休日の朝などはしばらく放ったらかしになっていたりする。きっと自分は、そんな普段はめったに見ることができない陽一の姿を見られるのが嬉しいのだろう、とこよりは思う。

そっと陽一の顎を撫でていると、好きな人のこれほど無防備な姿を堪能できるなんて、と、一緒に暮らせる幸せが胸を締めつけ、愛

しい気持ちが高まってくる。

こよりは、ゆっくりと身を起こすと、相変わらず穏やかな呼吸を繰り返している陽一の顔をのぞき込んだ。しばらくそのまま見つめていても、陽一は身じろぎもしない。

くちびるにするのはなんとなく気恥ずかしくて、こよりは、先ほどまで指を這わせていた顎のあたりに軽いキスを落とした。すると「どうせなら、こっち」

そう言って、片目だけを開いた陽一が、自分のくちびるをちょんちょんと指差した。

「あつ」

慌てて離れようとするこよりの体を、いち早く回された陽一の腕が引き止める。ちょうど腕枕のような体勢でこよりが倒れ込むと、頭の上から陽一の大きなあくびが聞こえてきた。

「おまえ、早いなあ」

「なんで起きてるの……」

「くすぐったかったから」

ということは、ひげをさわり始めたあたりで起きていたらしい。

寝込みを襲われるとは思わなかった、と陽一は笑っている。

恥ずかしさで顔を上げられないこよりをよそに、陽一はのんびりと声をかける。

「こより」

「……なんですか」

「こっちは？」

また、陽一が自分のくちびるを指差している気配がする。

「もう勘弁してください」

「ははは」

ああ、もう。これから、しばらくはこれをネタにされる。

でも、とこよりは思い直す。それもこれも、一緒にいられるからこそだ。

起きているならもう遠慮することはない、とばかりに大げさにた

め息をつきながらも、こよりは幸せをかみしめていた。

【終】

約束 秋のお話

「七度一分。だいぶ下がったね」

陽一から受け取った体温計を見たこよりが、ほっとしたような笑顔を浮かべた。

昨夜、週末なんだから付き合えよ、という同僚の誘いを断りきれず、酒を呑みに行ったまではよかったのだが。

したたか泥酔した陽一は、かろうじて家に帰り着きはしたものの、玄関口で力尽きて眠りこけてしまったのだった。そして今朝、こよりが見つけた時には既に遅く、陽一は何年ぶりかで風邪で寝込んでしまったという訳だ。

「おかゆ作ってあるけど、食べられそう？」

陽一は、なんとなくこよりの視線を避けてしまう。

「ん」

「じゃ、持ってくるね」

こよりは、そんな陽一の態度を気にする様子もなく、布団を軽く直して寝室から出て行く。

ドアが閉まる音がした後、こよりがいないことを確認すると、陽一は左手を布団から出して見つめる。そして大きなため息をついた。気まずい理由は二つある。まず一つは、この週末は紅葉を見に行こうと前々から約束をしていたことだ。

一日寝ていたおかげで明日には起きられそうだが、さすがに病み上がりで行楽という訳にはいかない。楽しみにしていたこよりの様子を思い出すと、看病してもらった分だけ、余計に申し訳無い気持ちになる。

とはいえ、それはまだいい。なんとかスケジュールをやりくりして、またの機会を作ればいい。

問題はもう一つの方である。

やばいよなあ……。陽一は、もう何度めかわからないため息を、

またもらす。

もう一つの理由。それは、見つめるその左手の薬指から、はめて
いるはずの指輪が消えていたことだった。

いったいどこでなくしたんだろう、と、陽一は寢床の中で昨日の
記憶を探る。

呑み屋に入った直後、おしぼりで手を拭いた時にははめていた気
がする。しかし、そこから先がわからない。アルコールとウイルス
に蹂躪された頭は完全に真っ白である。

こよりにばれないうちに、なんとか探し出さなければ。とはいえ、
記憶が無いのだから、手がかりも無いに等しい。

まずは、昨夜の呑み屋に連絡してみる以外に方法は無いだろう。

あとは、タクシーの可能性もある。

だが。

待てよ、と陽一は思い直す。ようやく頭がはつきりしてきた自分
は今頃こうして焦っているが、朝からずっと看病してくれていたこ
よりが気づいていないなどということが、果たしてあるだろうか。

一瞬、風邪のためではない悪寒が陽一の背筋に走った。

やがて、こよりがおかゆの器を持って戻って来た。

「お待たせ。熱いから気をつけてね」

こよりが、ベッドに身を起こした陽一の肩に上着をかけ、器を手
渡そうとする。しかし、陽一は左手を布団から出すことができない。

「置いていいぞ」

努めてさりげなく言ってみると、こよりが、極上の笑顔でとんで
もないことを言い出した。

「食べさせてあげる」

「はあ!？」

ぎよっとする陽一にはお構い無しに、こよりは、母親が小さな子供にしてやるようにれんげに息を吹きかけている。

「はい、あーん」

口元にれんげが差し出され、陽一は焦る。そんな恥ずかしい真似、できる訳が無い。

「一人で食えるって!」

「じゃ、どうぞ、手を出して」

「……」

「できないなら、あーん」

こいつ、絶対わかっててやってやがる。

つまり、この仕打ちは指輪を無くしたことへのお仕置きということらしい。そう思うと、あまり強い態度に出ることもできず、陽一は観念したように口を開けた。顔が熱いのは、熱のせいだけではないだろう。

陽一が素直に口を開けるとは思っていなかったのか、こよりは少し面食らったような顔をしたが、次にはくすくすと笑い出す。

「……早く食わせろ」

「はいはい。あーん」

こうして誰かに物を食べさせてもらうなど、何年振りのことだろうか。陽一はそう思いはしたが、それは幼い頃の甘い記憶を呼び戻すよりも、現在の羞恥を煽るものでしかない。弱った体に米の滋味が染みていくのを感じる余裕も無い。

早くこの責め苦から逃れたい。ただひたすらにそればかり願いながら、陽一はおかゆをたいらげることに専念した。

「陽一さん」

「なんだよ」

やっとの思いでおかゆを食べきり、再び布団に潜り込んだ陽一の目の前に、こよりが何かを差し出した。

「これ、なんだ？」

「あつ」

こよりがその指先で玩んでいるのは指輪だった。おそらくは陽一の。

「ごめんなさい。意地悪しちゃった」

陽一が苦虫をかみつぶした表情になるのに対し、あーん攻撃を思う存分満喫したらしいこよりが、あっけらかんと答える。

なくしたのではなかった。すべて、こよりの思いつきにはまったということなのだ。

「おまえなあ……」

「だって、今日の約束、本当に楽しみにしてたんだもの」

こよりに拗ねたようなまなざしで見つめられれば、陽一としてはもう何も言えない。

「手、貸して」

こよりは布団の中から陽一の左手を探り出すと、薬指にそつと指輪をはめた。それがまるで結婚式の誓いのようで、陽一は照れくさを隠せない。

「結婚式みたい」

こよりも同じことを考えたらしく、そうつぶやいて、小さく笑う。

陽一はいたたまれず、目を閉じた。

「寝る」

「うん。おやすみなさい」

力を抜いて息を吐くと、さっき飲んだ薬が効いてきたのか、ゆるやかな眠気が近づく。額の生え際のあたりを撫でるこよりの指の感触に身をまかせていると、陽一のまぶたの裏に、ふと、昨夜の同僚の顔が浮かんだ。

記憶の隙間から浮かび上がってきたのは、その男が離婚を考えて

いるともらした時の表情だった。

『人間の気持ちってのは、変わっちゃうものなんだよな』

同僚は自嘲気味に笑うと、それ以上のことは一切話さなかったため、何があつたのかはわからない。ただ、抗いきれないものに出会ってしまつた、とても言いたげな表情が印象的だった。

入社以来の付き合い合いであるその男には、慰めや励ましは余計なお世話だとわかつていたから、ただ朝まで陽気に飲み明かしたのだ。少しでも気持ちが軽くなればと思つて。

だが、それは同僚の気持ちだけの話ではなかつたのかもしれない。陽一は、自分自身の気持ちも軽くしたかつたのではないだろうかと思ふ。

人の心は変わる。それは自分とこよりも起こり得ることであり、きつと起きてしまえば止められない。今の二人には想像できないことだとしてもだ。そんな、不安と呼ぶほどでもない、違和感に似た思いをどうにかしたかつたのだ。

布団から手を出し、陽一の髪を撫でるこよりの手をとると、彼女の指輪の感触が指先にあたつた。そのまま口元へずらして指輪へ軽くくちづけると、こよりが驚きの声をあげる。

「陽一さん？」

こちらだけ恥ずかしい思いをさせられて、たまるものか。そんな思いも少しはある。だが、それ以上にこよりのぬくもりがいとおいしい。

「こより」

「は、はい」

「紅葉、見に連れて行くから」

陽一の閉じたまぶたの向こうで、こよりがほほ笑む気配がした。

「いつでもいいからね」

いつまでも一緒にいるから。

そう言われているような気がして、心のしこりがふわりと溶けるのを感じ、そのまま陽一は眠りに落ちていった。

【終】

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6372v/>

彼と彼女の短いお話

2011年8月28日21時34分発行